

2020 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	食物アレルギー対応に関する保育者の思いと課題 —子どもも保育者も安心して楽しい給食を目指して—
キーワード	①食物アレルギー、②リスクマネジメント、③保育者の専門性

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	タムラ カヨ 田村 佳世	所属等	愛知学泉大学 家政学部 こどもの生活学科 准教授
プロフィール	私は保育者として働いていた経験を活かし保育学研究、保育者養成に努めています。保育という仕事は、確かに忙しく、大切な子どもの命を預かっている責任の重い仕事ですが、子どもたちの笑顔や真剣な眼差し、日々成長していく姿を見ると他にはないやりがいがある仕事だと思っています。そのため今は研究者として、子どもたちや、先生たちが困っていること、大変だと感じていることに向き合い、少しずつでも解決し、子ども、保護者、保育者の笑顔を守っていきたくと考えています。		

1. 研究の概要

本研究は、これまでの研究で明らかにしてきた食物アレルギー対応に関する量的な統計結果を踏まえ、アレルギー対応に関する保育者の思いについて分析し、概念として構築することを試みた研究である。そして安全かつ子どもの思いに寄り添った食物アレルギー対応に関する課題を明らかにした。下記に令和2年度の研究概要を示す。

「テキストマイニングを用いた自由記述の分析」

- (1) 研究協力者：愛知県内の担任保育者（園長等管理者は除き、加配保育士、フリー保育士は含む）232名（園ベース回収率82%）。
- (2) 調査期間：2020年6月～8月
- (3) 調査内容：質問紙にて次の項目の選択、自由記述を求めた。
役職、経験年数、食物アレルギーを持つ子どもの担任経験の有無、食物アレルギー対応に関する困ったこと、不安に感じたことの有無とその内容の自由記述。
- (4) 分析方法：食物アレルギー対応に関する困ったこと、不安に感じていることに関する自由記述から、保育者の食物アレルギー対応に関する不安要因の傾向を明らかにするため、テキストマイニングによる量的分析を行い、考察を行った。
テキストマイニングは、自由記述等の文章から意味ある情報や特徴を客観的に抽出し、その構造を明らかにすることに適した分析方法である。本研究では、「ユーザーローカルテキストマイニングツール2）」を解析ソフトとして使用した。
- (5) 倫理的配慮：本研究は、愛知文教女子短期大学 研究倫理委員会（愛文短第29-1）令和2年1月30日の承認を得て実施した。また、調査協力者には、本研究の趣旨、データの取り扱い及び成果の発表方法について書面にて説明し、郵便での返送をもって承諾とみなした。

2. 研究の動機、目的

近年、食物アレルギーを有する子どもは増加傾向にあり、給食を提供する保育所等ではその対応に大変苦慮している。なぜなら個々に違う除去食対応の煩わしさに加え、「保育所等における食物アレルギー対応ガイドライン」（2019 厚生労働省）や各園で作成したマニュアルを活用していても、多くの誤配、誤食事故が発生している（2018 愛知文教女子短期大学 保育

所調査報告書) ためである。そして**食物アレルギーは誤配、誤食によるアナフィラキシーショックによって命に関わる事故にもなりかねないため、給食に関わる職員は、事故を起こしてはいけないという緊張状態で調理や配膳を行っている。**そのため、本来給食の時間とは、安全で楽しい時間のはずであるが、必ずしもそうとはいえない現状がある。また、ガイドラインやマニュアル、保育所保育指針においても、安全な給食の提供方法の手順や注意事項は示されているものの、他の子どもたちと違うメニュー、対応を受けて給食を食べる子どもの心情を配慮した指示、研究はない。命が何よりも大事であることは自明なことではあるが、保育として考えると、安全と教育の関係についてはしばしば対極に考えられる場合がある。

そのような疑問を持っていたある日、実習中の学生が園の給食の場面を見て「**アレルギーがあるからみんなとは別の机で、一人で食べている子がいてなんだか一人ぼっちでさみしそう**」と言った。実習生の率直な一言は、それまでどこかで仕方がないとあきらめていた私の思いに刺さり、**本研究の動機となった。**確かに給食の除去対応は、除去メニューや配膳の注意だけでなく、子ども同士でおかずを交換したりして誤食をしてしまう危険から、他の子どもから席を離したり、別室を設けることも対応として必要である。一方で、食事はできれば友達や保育者と和やかに会話をしながら楽しく食することも保育においては重要である。それは、食物アレルギーを持つ子どもでも例外ではない。むしろ、そのような**食事に制限を持っている子どもだからこそ、食事は楽しいという経験が必要だ**ともいえる。

保育とは保育所保育指針にあるように、環境を整え、子どもたちが主体的に豊かな経験ができるように日々工夫するものである。しかし、**危険から子どもを守ろうとすればするほど制限は増え、目指す保育からは遠ざかり、保育者は様々な葛藤を抱えたまま保育を行っているのではないだろうか。**子どもたちと毎日関わる保育者の思い、葛藤、悩みを無視して、安全かつ良い保育は存在し得ないはずである。

そこで**本研究の目的は、食物アレルギー対応に関する保育の課題を明らかにすることである。**そして、子どもと保育者が安心して楽しく給食の時間を過ごすための保育の在り方について一考した。

3. 研究の結果

表 1 は、自由記述データから抽出された単語について、品詞別に出現頻度上位 5 項目をスコアの高い順に示したものである。図 1 は、自由記述データから抽出された単語の共起ネットワークを示したものである。

表 1 自由記述から抽出された単語の品詞別出現頻度及びスコアの上位5項目

No	名詞			動詞			形容詞		
	単語	スコア	出現頻度	単語	スコア	出現頻度	単語	スコア	出現頻度
1	アレルギー児	108,649	78	してしまう	192,273	131	うまく	4,984	5
2	アレルギー	82,710	271	食べる	4,404	168	難しい	726	31
3	給食	56,860	118	伝える	2,722	39	細かい	370	9
4	配膳	40,288	56	触れる	2,231	29	低い	214	10
5	不安	27,510	170	感じる	1,316	51	わかりやすい	165	5

表 1 より出現頻度が一番高かった単語は「アレルギー」であった。図 1 の共起ネットワークから、「アレルギー」は「不安」「持つ」「感じる」「してしまう」「食べる」「給食」「子ども」との共起が強かった。具体的な文章としては、「牛乳アレルギーの子に近くで牛乳がこぼれないか不安を感じていた」、「アレルギーを持つ子がいないクラスの時は、自分自身の知識がなく、対応等どうしたら良いか分からず不安だった」「初めてのクラスで、アレルギーがある子どもがいたため、おやつ、給食の時間は、いつも緊張する」などがみられた。「アレルギー」に関して保育者は、自身の知識や対応に不安を感じていることが分かる。また、「てしまう」という単語に着目すると、「アレルギー食材をどうしてもこぼしてしまうのですぐに拭いたり取ったりする必要があり大変だった」や、「アレルギー児が他児のものを、他児がアレルギー

